「九」より「鳩」の方がやさしい……

吉田　どこの国でも実際に社会で使っている表記を教えるということはあるわけですけれども、その場合にも順序があって、綴りの難しいのはあとにするとか、そのなかでの順序はありますね。先生の場合は、最初は順序まではいかなくて、とにかく本物をやらなければならないという考え方でお始めになった。その点で誤解する人は、それはあまり教育的な発想ではなくて、もっと順序があるべきなんだから、要するに、時代に逆行することになりはしないかというような考えを持つ人があるかもしれません。ところが、実際おやりになっているなかで、漢字を教えるという場合だって、やはり教育的配慮というのはある程度必要だということになってくるわけですね。

石井　はじめやさしいものから難しいものにだんだん移っていこうということでやったわけなんです。

ところがこれも、われわれがやさしいと思うものが幼児には難しくて、われわれが難しいと思っているものが、かえって幼児は喜んでそちらを先に覚えるという結果が出てきたわけです。

よく私が例に引くんですが、「鳩」という字を分解しますと、「九」という字と「鳥」という字になりますが、従来は九がやさしいということで九から教えてそれから鳥に移り、そして九と鳥の合わさった鳩を教える。

これは、だれもが常識的にそう考えますけれども、実際に幼児に教えてみますと、鳩なら三歳の子どもでも覚える。これは例外なく覚えますね。ところが、九という字になりますと、なかなか覚えられない。逆に鳩から鳥を覚え、鳥から九というような、具象的なものからだんだんと抽象的なものへ理解が進むというのが、幼児の理解の進み方でもあるということが、理論的にはいままでもいわれておったんですけれども、それを漢字の具体的な指導にあてはめてみると、じつは適用されなかったということが、いまになるとわかるわけです。鳥という言葉を理解するのでも、鳩を知り、鶴を知り、鶏を知らなければ、鳥という概念はつかめないんです。最初から鳥というものを理解させようとしても、どだい無理です。ですから、鳩とか、鶴とか、鶏などという言葉は、子どもたちはすぐ覚えます。字形が複雑だということは、認識の手がかりが一つふえるということなのです。文字を一つの符号として見る場合には、あまり簡単なものよりは、むしろ複雑なもののほうが、手がかりが多くて、しっかり覚えられるんですね。

吉田　このごろの子どもというのは、テレビを見ていていろいろ文字が出てきますと、マークみたいな形で覚えてしまうわけですね。かなり複雑な文字でも読める字が出てくる。

石井　むしろそういう複雑なものからだんだん、たとえば鶴と、鶏と、鳩を習いますと、そこに共通してある鳥という部分から、同時に鳥という概念を導き出す。そして鳥という言葉を理解するというように認識を育てていくのが、これが筋道だということも、やっていく間に発見したことなんです。